

6. 合成関数の微分公式

合成関数の微分 (チェイン・ルール)

命題 6.1 (合成関数の微分公式 (命題 5.6 再録)). 領域 $D \subset \mathbb{R}^2$ で定義された微分可能な 2 変数関数 $f(x, y)$ と, 像が D に含まれる微分可能な曲線 $\gamma(t) = (x(t), y(t))$ に対して, 1 変数関数 $F(t) = f(x(t), y(t))$ は微分可能で,

$$\frac{dF}{dt}(t) = \frac{\partial f}{\partial x}(x(t), y(t)) \frac{dx}{dt}(t) + \frac{\partial f}{\partial y}(x(t), y(t)) \frac{dy}{dt}(t)$$

が成り立つ.

偏微分の意味を考えれば, 命題 6.1 から直ちに次のことがわかる:

系 6.2 (チェイン・ルール¹⁾). 2 変数関数 $f(x, y)$ と, 2 つの 2 変数関数の組

$$x = x(\xi, \eta), \quad y = y(\xi, \eta)$$

がともに微分可能であるとき²⁾, 2 変数関数

$$\tilde{f}(\xi, \eta) = f(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta))$$

は微分可能で, 次が成り立つ:

$$\begin{aligned} \frac{\partial \tilde{f}}{\partial \xi}(\xi, \eta) &= \frac{\partial f}{\partial x}(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta)) \frac{\partial x}{\partial \xi}(\xi, \eta) + \frac{\partial f}{\partial y}(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta)) \frac{\partial y}{\partial \xi}(\xi, \eta) \\ \frac{\partial \tilde{f}}{\partial \eta}(\xi, \eta) &= \frac{\partial f}{\partial x}(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta)) \frac{\partial x}{\partial \eta}(\xi, \eta) + \frac{\partial f}{\partial y}(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta)) \frac{\partial y}{\partial \eta}(\xi, \eta). \end{aligned}$$

注意 6.3. 物理学や工学では, 系 6.2 の $\tilde{f}(\xi, \eta)$ のことを $f(x, y)$ と同じ f を用いて $f(\xi, \eta)$ のように表すことがある. 文脈で独立変数がはつきりわかるのならこの記法が便利である. このとき (適当に省略して) 系 6.2 の結論を

$$\frac{\partial f}{\partial \xi} = \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial \xi} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \xi}, \quad \frac{\partial f}{\partial \eta} = \frac{\partial f}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial \eta} + \frac{\partial f}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \eta}$$

と表すことができる. あるいは, 従属変数に名前をつけて

$$z = f(x, y) = f(x(\xi, \eta), y(\xi, \eta)) = \tilde{f}(\xi, \eta)$$

と書いたとき, チェイン・ルールを

$$\frac{\partial z}{\partial \xi} = \frac{\partial z}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial \xi} + \frac{\partial z}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \xi}, \quad \frac{\partial z}{\partial \eta} = \frac{\partial z}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial \eta} + \frac{\partial z}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial \eta}$$

と書くこともできる. さらに行列の積を用いて

$$(6.1) \quad \begin{pmatrix} \frac{\partial z}{\partial \xi} & \frac{\partial z}{\partial \eta} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\partial z}{\partial x} & \frac{\partial z}{\partial y} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \frac{\partial x}{\partial \xi} & \frac{\partial x}{\partial \eta} \\ \frac{\partial y}{\partial \xi} & \frac{\partial y}{\partial \eta} \end{pmatrix}$$

とも書く.

\mathbb{R}^m から \mathbb{R}^n への写像とその微分 領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ 上で定義された写像 $F: D \rightarrow \mathbb{R}^n$ を考える. ただし n も正の整数である. この写像は D の各点 (x_1, \dots, x_m) に対して \mathbb{R}^n の要素 $F(x_1, \dots, x_m)$ を対応させる対応の規則である. $F(x_1, \dots, x_m)$ とおくとこれは \mathbb{R}^n の要素であるから, n 個の実数の組であり, それを (y_1, \dots, y_n) と書けば各成分 y_j は (x_1, \dots, x_m) によって定まる一つの実数である. すなわち y_j は (x_1, \dots, x_m) の関数となっているから, 写像 $F: \mathbb{R}^m \supset D \rightarrow \mathbb{R}^n$ とは領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ 上で定義された n 個の関数の組とみなすことができる:

$$(6.2) \quad F: \mathbb{R}^m \supset D \ni (x_1, \dots, x_m) \mapsto (F_1(x_1, \dots, x_m), \dots, F_n(x_1, \dots, x_m)) \in \mathbb{R}^n.$$

ただし $F_j: D \rightarrow \mathbb{R}$ ($j = 1, \dots, n$) は D 上で定義された m 変数関数であり, F の成分とよぶ³⁾. 式が長くなるのを避けるために, ベクトル記法を用いて

$$\mathbf{y} = F(\mathbf{x}) \quad (\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_m), \mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n))$$

などと書くことがある. 写像 F の成分が F_j ($j = 1, \dots, n$) であることを $F = (F_1, \dots, F_n)$ と書くことにしよう.

写像 $F = (F_1, \dots, F_n): \mathbb{R}^m \supset D \rightarrow \mathbb{R}^n$ が C^k -級であるとは⁴⁾, 各 j ($j = 1, \dots, n$) に対して関数 $F_j: D \rightarrow \mathbb{R}$ が C^k -級 (23 ページ; 2 変数関数に対する定義だが, 変数が多い場合も同様) となることである.

^{*}) 2014 年 5 月 21 日 (2014 年 5 月 28 日訂正)

¹⁾ チェイン・ルール: the chain rule.

²⁾ ξ : xi; η : eta. ギリシア文字 ξ, η, ζ (zeta) はしばしばローマ文字 (x, y, z) の対応物として使われる.

³⁾ 写像: a map; 成分: components.

⁴⁾ 本来なら微分可能性から定義していくべきだが, 簡単のため C^k -級概念だけを定義しておく. こういうもののみを考えていても実用上はほとんど問題がない.

定義 6.4. 領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ 上で定義された C^1 -級の写像 $F = (F_1, \dots, F_n): D \rightarrow \mathbb{R}^n$ に対して

$$dF = \begin{pmatrix} \frac{\partial F_1}{\partial x_1} & \cdots & \frac{\partial F_1}{\partial x_m} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial F_n}{\partial x_1} & \cdots & \frac{\partial F_n}{\partial x_m} \end{pmatrix} \quad (n \times m \text{ 行列})$$

を F の微分またはヤコビ行列⁵⁾ という。ただし (x_1, \dots, x_m) は $D \subset \mathbb{R}^m$ の座標である。

合成写像とその微分 領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ と $U \subset \mathbb{R}^n$ 上で定義された写像 $F: D \rightarrow \mathbb{R}^n$ と $G: U \rightarrow \mathbb{R}^k$ が与えられ、かつ任意の $x = (x_1, \dots, x_m) \in D$ に対して $F(x) \in U$ が成り立つとき、

$$G \circ F: \mathbb{R}^m \supset D \ni x \mapsto G(F(x)) \in \mathbb{R}^k$$

で与えられる写像 $G \circ F: \mathbb{R}^m \supset D \rightarrow \mathbb{R}^k$ を F と G の合成写像⁶⁾ という。

命題 6.5. 上の状況で、 F, G がともに C^1 -級ならば

$$d(G \circ F) = dG dF, \quad \text{すなわち} \quad d(G \circ F)(x) = dG(F(x)) dF(x)$$

が成り立つ。ただし右辺の積は行列の積を表す。

逆写像 領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ の各点 x に対してそれ自身を対応させる写像

$$\text{id}_D: D \ni x \mapsto \text{id}_D(x) = x \in D$$

を D 上の恒等写像⁷⁾ という。領域 $D \subset \mathbb{R}^m$ から $U \subset \mathbb{R}^n$ への写像 $F: D \rightarrow U$ に対して、写像 $G: U \rightarrow D$ で

$$G \circ F = \text{id}_D, \quad F \circ G = \text{id}_U$$

⁵⁾微分: the differential; ヤコビ行列: the Jacobian matrix; ヤコビ: Jacobi, Carl Gustav Jacob (1804–1851, D).

⁶⁾合成: the composition.

⁷⁾恒等写像: the identity map; 定義域 D が文脈より自明な場合は、 id_D を単に id と書く場合がある。

をみたすものが存在するとき、 G を F の逆写像⁸⁾ といい、 $G = F^{-1}$ と書く。

例 6.6. 領域

$$D = \left\{ (r, \theta) \in \mathbb{R}^2 \mid r > 0, -\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2} \right\}, \quad U = \{ (x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x > 0 \}$$

に対して

$$F: D \ni (r, \theta) \mapsto F(r, \theta) = (r \cos \theta, r \sin \theta) \in U,$$

$$G: U \ni (x, y) \mapsto \left(\sqrt{x^2 + y^2}, \tan^{-1} \frac{y}{x} \right) \in D$$

とすると $G = F^{-1}$, $F = G^{-1}$ である。実際、 $(r, \theta) \in D$ に対して $-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$ なので $\tan^{-1} \tan \theta = \theta$ (定義 4.2 参照) だから、 $r > 0$ に注意すれば

$$\begin{aligned} G \circ F(r, \theta) &= G(r \cos \theta, r \sin \theta) = \left(\sqrt{r^2 \cos^2 \theta + r^2 \sin^2 \theta}, \tan^{-1} \frac{r \sin \theta}{r \cos \theta} \right) \\ &= (r, \tan^{-1} \tan \theta) = (r, \theta) = \text{id}_D(r, \theta). \end{aligned}$$

一方、 $\theta = \tan^{-1}(y/x)$ とすると、逆正接関数の定義から $-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$ だから $\cos \theta > 0$ 。したがって、 $x > 0$ に注意して

$$\begin{aligned} \cos \tan^{-1} \frac{y}{x} &= \cos \theta = \frac{1}{\sqrt{1 + \tan^2 \theta}} = \frac{1}{\sqrt{1 + \tan^2 \tan^{-1} \frac{y}{x}}} = \frac{1}{\sqrt{1 + \frac{y^2}{x^2}}} \\ &= \frac{|x|}{\sqrt{x^2 + y^2}} = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}}, \\ \sin \tan^{-1} \frac{y}{x} &= \sin \theta = \cos \theta \tan \theta = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} \frac{y}{x} = \frac{y}{\sqrt{x^2 + y^2}}. \end{aligned}$$

これらから

$$\begin{aligned} F \circ G(x, y) &= F \left(\sqrt{x^2 + y^2}, \tan^{-1} \frac{y}{x} \right) \\ &= \left(\sqrt{x^2 + y^2} \cos \tan^{-1} \frac{y}{x}, \sqrt{x^2 + y^2} \sin \tan^{-1} \frac{y}{x} \right) = (x, y) = \text{id}_U(x, y). \quad \diamond \end{aligned}$$

注意 6.7. 座標平面上の点 (x, y) に対して例 6.6 のように $(r, \theta) = G(x, y)$ と定めるとき、 (r, θ) を座標平面の極座標という。これに対して、 (x, y) を直交

⁸⁾逆写像: the inverse map; F^{-1} : the inverse of F/F -inverse; ここで定義域の \mathbb{R}^m , 値域の \mathbb{R}^n は一般に $m = n$ とは限らないが、微分可能な写像が微分可能な逆写像をもつ場合は $m = n$ が成り立つ (命題 6.8 参照)。

座標系 あるいは デカルト座標系という⁹⁾ .

例 6.6 の表示では, (x, y) 平面の右半分しか極座標で表示できないが, 通常は次のように平面のほぼ全体を表せるように拡張する: 領域

$$\begin{aligned}\tilde{D} &= \{(r, \theta) \in \mathbb{R}^2 \mid r > 0, -\pi < \theta < \pi\}, \\ \tilde{U} &= \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid y \neq 0 \text{ または } x > 0\}\end{aligned}$$

を考え, $h: \tilde{U} \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$h(x, y) := \begin{cases} \tan^{-1} \frac{y}{x} & (x > 0) \\ -\tan^{-1} \frac{x}{y} + \frac{\pi}{2} & (x \leq 0, y > 0) \\ -\tan^{-1} \frac{x}{y} - \frac{\pi}{2} & (x \leq 0, y < 0) \end{cases}$$

と定め¹⁰⁾ ,

$$\begin{aligned}\tilde{F}: \tilde{D} \ni (r, \theta) &\mapsto \tilde{F}(r, \theta) = (r \cos \theta, r \sin \theta) \in \tilde{U}, \\ \tilde{G}: \tilde{U} \ni (x, y) &\mapsto (\sqrt{x^2 + y^2}, h(x, y)) \in \tilde{D}\end{aligned}$$

とおけば $\tilde{F} = \tilde{G}^{-1}$, $\tilde{G} = \tilde{F}^{-1}$ となる. 座標平面上の点 (x, y) に対応する $(r, \theta) = \tilde{G}(x, y)$ を (x, y) の極座標という.

命題 6.8. 写像 $F: \mathbb{R}^m \supset D \rightarrow U \subset \mathbb{R}^n$ が逆写像 $G = F^{-1}$ をもち, F, F^{-1} ともに C^1 -級ならば, $m = n$ で,

$$dF^{-1} = (dF)^{-1} \quad \text{すなわち} \quad d(F^{-1})(F(\mathbf{x})) = (dF(\mathbf{x}))^{-1}$$

が成り立つ. ただし右辺の “-1” は m 次正方行列の逆行列を表す.

証明. 恒等写像の微分が単位行列 E となることに注意して, $F^{-1} \circ F = \text{id}_D$ に命題 6.5 を適用すれば $dF^{-1}dF = E$, また $F \circ F^{-1} = \text{id}_U$ に命題 6.5 を適用すれば $dFdF^{-1} = E$. したがって dF^{-1} は dF の逆行列である. 逆行列が存在するのは正方行列に限るので, $m = n$ が成り立つ. \square

⁹⁾極座標: the polar coordinate system; 直交座標系: the orthogonal coordinate system; デカルト座標系: the Cartesian coordinate system; デカルト: Descartes, René (Renatus Cartesius; 1596–1650).

¹⁰⁾ $h(x, y)$ は原点 $(0, 0)$ と点 (x, y) を結ぶ平面上の有向線分が x 軸の正の部分と成す角を表している. この関数は, たとえば C や Fortran などでは $\text{atan2}(x, y)$ という関数として実装されている.

変数変換

例 6.9 (平面極座標とラプラシアン). 例 6.6 の状況を考える:

$$(6.3) \quad x = x(r, \theta) = r \cos \theta, \quad y = y(r, \theta) = r \sin \theta.$$

このとき $F: (r, \theta) \mapsto (x, y)$ の微分 (定義 6.4) は

$$(6.4) \quad dF = \begin{pmatrix} x_r & x_\theta \\ y_r & y_\theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -r \sin \theta \\ \sin \theta & r \cos \theta \end{pmatrix}$$

である. 一方, 逆写像 $G = F^{-1}: (x, y) \mapsto (r, \theta)$ の微分は

$$(6.5) \quad dG = \begin{pmatrix} r_x & r_y \\ \theta_x & \theta_y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} & \frac{y}{\sqrt{x^2 + y^2}} \\ \frac{-y}{x^2 + y^2} & \frac{x}{x^2 + y^2} \end{pmatrix}$$

となる¹¹⁾ .

平面上の C^2 -級関数 $f(x, y)$ に対して

$$(6.6) \quad \Delta z = \Delta f = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2}$$

を対応させる Δ をラプラス作用素またはラプラシアンという¹²⁾ . いま, $f(x, y)$ を (6.3) によって (r, θ) の関数とみなしたとき, Δf を f の r, θ に関する偏導関数を用いて表そう.

式 (6.5) とチェイン・ルール (系 6.2) を用いれば, 偏微分の順序交換 (定理 3.13) に注意して

$$\begin{aligned}\frac{\partial f}{\partial x} &= r_x \frac{\partial f}{\partial r} + \theta_x \frac{\partial f}{\partial \theta} = \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} f_r - \frac{y}{x^2 + y^2} f_\theta \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} &= \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} f_r - \frac{y}{x^2 + y^2} f_\theta \right) \\ &= \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} \right) f_r + \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} \frac{\partial f_r}{\partial x} - \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{y}{x^2 + y^2} \right) f_\theta - \frac{y}{x^2 + y^2} \frac{\partial f_\theta}{\partial x} \\ &= \frac{y^2}{\sqrt{x^2 + y^2}^3} f_r + \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} \left(\frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} f_{rr} - \frac{y}{x^2 + y^2} f_{r\theta} \right) \\ &\quad + \frac{2xy}{(x^2 + y^2)^2} f_\theta - \frac{y}{x^2 + y^2} \left(\frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}} f_{\theta r} - \frac{y}{x^2 + y^2} f_{\theta\theta} \right)\end{aligned}$$

¹¹⁾式 (6.4), (6.5) が命題 6.8 をみたしていることを確かめなさい.

¹²⁾ラプラス作用素: the Laplace operator; ラプラシアン: the Laplacian; ラプラス: Laplace, Pierre-Simon (1749–1827, F). ラプラシアンは “何に使うもの” というよりは, 物理学や工学の至るところに現れる作用素である.

$$= \frac{x^2}{x^2+y^2} f_{rr} - \frac{2xy}{\sqrt{x^2+y^2}^3} f_{r\theta} + \frac{y^2}{(x^2+y^2)^2} f_{\theta\theta} + \frac{y^2}{\sqrt{x^2+y^2}^3} f_r + \frac{2xy}{(x^2+y^2)^2} f_\theta.$$

$$\frac{\partial^2 f}{\partial y^2} = \frac{y^2}{x^2+y^2} f_{rr} + \frac{2xy}{\sqrt{x^2+y^2}^3} f_{r\theta} + \frac{x^2}{(x^2+y^2)^2} f_{\theta\theta} + \frac{x^2}{\sqrt{x^2+y^2}^3} f_r - \frac{2xy}{(x^2+y^2)^2} f_\theta.$$

したがって $r = \sqrt{x^2+y^2}$ に注意すれば

$$(6.7) \quad \Delta f = f_{xx} + f_{yy} = f_{rr} + \frac{1}{r} f_r + \frac{1}{r^2} f_{\theta\theta}$$

となる. \diamond

例 6.10. 例 6.9 を少し異なった方法で計算しよう: 上の記号をそのまま用いると, 命題 6.8 をもちいれば

$$(6.8) \quad dG = d(F^{-1}) = (dF)^{-1} = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\frac{1}{r} \sin \theta & \frac{1}{r} \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} r_x & r_y \\ \theta_x & \theta_y \end{pmatrix}$$

である. したがって

$$\frac{\partial}{\partial x} = \cos \theta \frac{\partial}{\partial r} - \frac{1}{r} \sin \theta \frac{\partial}{\partial \theta}, \quad \frac{\partial}{\partial y} = \sin \theta \frac{\partial}{\partial r} + \frac{1}{r} \cos \theta \frac{\partial}{\partial \theta}.$$

これを用いれば

$$\begin{aligned} \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} &= \cos^2 \theta f_{rr} - \frac{2}{r} \cos \theta \sin \theta f_{r\theta} \\ &\quad + \frac{1}{r^2} \sin^2 \theta f_{\theta\theta} + \frac{1}{r} \sin^2 \theta f_r + \frac{2}{r^2} \sin \theta \cos \theta f_\theta \\ \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} &= \sin^2 \theta f_{rr} + \frac{2}{r} \cos \theta \sin \theta f_{r\theta} \\ &\quad + \frac{1}{r^2} \cos^2 \theta f_{\theta\theta} + \frac{1}{r} \cos^2 \theta f_r - \frac{2}{r^2} \sin \theta \cos \theta f_\theta \end{aligned}$$

なので, 例 6.9 と同じ結果を得る. \diamond

問 題 6

6-1 平面のスカラ場 $f(x, y)$ が $\Delta f = f_{xx} + f_{yy} = 0$ をみたしているとき, f を調和関数という (第 2 回の問題 2-4).

- (1) 1 変数関数 $F(t)$ を用いて $f(x, y) = F(\sqrt{x^2+y^2})$ の形に表される調和関数をすべて求めなさい.
- (2) $f(x, y) = \tan^{-1} \frac{y}{x}$ は調和関数であることを確かめなさい.

6-2 定数 $c (\neq 0)$ に対して

$$\xi = x + ct, \quad \eta = x - ct$$

により変数変換 $(t, x) \mapsto (\xi, \eta)$ を定める. このとき, C^2 -級関数 $f(t, x)$ に対して

$$\frac{\partial^2 f}{\partial t^2} - c^2 \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} = -4c^2 \frac{\partial^2 f}{\partial \xi \partial \eta}$$

となることを確かめなさい.

さらに, $f_{tt} - c^2 f_{xx} = 0$ を満たす C^2 -級関数 f は, 2 つの C^2 -級の 1 変数関数 F, G を用いて

$$f(t, x) = F(x + ct) + G(x - ct)$$

という形に書けることを示しなさい.

方程式 $f_{tt} = c^2 f_{xx}$ を波動方程式という. ここに述べたことを, “波動方程式のダランベールの解法¹³⁾” という (第 2 回の問題 2-3).

6-3 空間のスカラ場 $f(x, y, z)$ に対して $\Delta f = f_{xx} + f_{yy} + f_{zz}$ を対応させる Δ を空間のラプラス作用素という (第 2 回の問題 2-5). 空間の変数変換

$$\begin{aligned} x &= r \cos \theta \cos \varphi, & y &= r \sin \theta \cos \varphi, & z &= r \sin \theta \\ & & & & & (r > 0, -\pi < \theta < \pi, -\frac{\pi}{2} < \varphi < \frac{\pi}{2}) \end{aligned}$$

に対して

$$\begin{pmatrix} r_x & r_y & r_z \\ \theta_x & \theta_y & \theta_z \\ \varphi_x & \varphi_y & \varphi_z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta \cos \varphi & \sin \theta \cos \varphi & \sin \varphi \\ -\frac{1}{r} \frac{\sin \theta}{\cos \varphi} & \frac{1}{r} \frac{\cos \theta}{\cos \varphi} & 0 \\ -\frac{1}{r} \cos \theta \sin \varphi & -\frac{1}{r} \sin \theta \sin \varphi & \frac{1}{r} \cos \varphi \end{pmatrix}$$

であることを確かめ,

$$\Delta f = f_{rr} + \frac{2}{r} f_r + \frac{1}{r^2 \cos^2 \varphi} f_{\theta\theta} + \frac{1}{r^2} f_{\varphi\varphi} - \frac{1}{r^2} \tan \varphi f_\varphi$$

となることを確かめなさい.

¹³⁾ダランベール: d'Alembert, Jean Le Rond (1717–1783, F).